

Title	タイ族におけるジャータカの伝承
Author(s)	吉川, 利治
Citation	大阪外国語大学学報. 29 p.429-p.438
Issue Date	1973-02-28
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80493
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

タイ族におけるジャータカの伝承

吉 川 利 治

The dissemination of the Jātaka Stories to the Thai

Toshiharu YOSHIKAWA

There are two Jātaka legends disseminated to the Thai. One is the Jātaka in the Pali text which contains 547 Jātakas or the Birth-stories and the other is Zimmé Paṇṇāsa or 50 Jātakas written by a Thai monk of Chiangmai, Thailand circa A. D. 1450-1650.

Both the Jātakas themselves are interesting as specimens of Buddhist literature but our foremost interest to them consists in their influence and relation to Thai literature and folk-lore, especially Zimmé Paṇṇāsa possesses a special value to produce many famous Thai poems and popular stories. It is said that Zimmé Paṇṇāsa is an original legendary of the Thai, though I wonder whether it is correct or not. We should study Thai literature and folk-lore on the relation to the Jātaka legends.

0.0 一般によく知られているように、ジャータカ（本生経）とは、ブッダの前生物語のことであり、ブッダが悟った人となる以前の修行者の姿としてボーディサッタ（菩薩）とか、時にはマハーサッタ（大士）と呼ばれる者の物語である。その前世物語では、ボーディサッタが、沙門、バラモン、国王、大臣、商人等の人間や神、動物の様々な姿となって登場し、過去永劫の間、輪廻転生をくり返す。また、その物語は冒頭に「その昔、ある時、ボーディサッタは某々の胎内に生をうけ………」とか、最後の結びのことばにブッダがかならず「その時の某々はわたしであった」という表現のあることが特色をなしている。そして物語の中に現われる人物や動物、神々をボーディサッタにするこの方法によれば、民族の口碑や伝説をことごとくジャータカ化することもできる。

タイ族に伝えられたジャータカは、他の南方仏教圏にあるビルマ、カンボジアと同様に、パーリ経典にある547話（タイでは一般に＜*Harōihasip Chat*＞「ジャータカ550話」と呼んでいる）がよく知られている。また、チエンマイの僧侶が著わしたという＜*Panyat Chadok*＞(Paṇṇāsa-Jātaka)「ジャータカ50話」別名＜*Zimmé-Paṇṇāsa*＞「チエンマイ50話」がある。タイ族におけるこの二つのジャータカ譚は、宗教、文学面に多大の影響を与えたが、本稿では書誌学的にこの

二つのジャータカ譚のタイ族の間での展開をながめ、かつ今後の研究課題としての問題点を挙げてみたい。

1.1 タイ族（本稿ではシャム族，北タイ，東北タイおよびラオスのラーオ族を指すことにする）の間にジャータカが伝えられていることを示す最も古い記録は，スコタイ王朝，第四代 Li-Thai 王 Thammaracha 1 世（A.D. 1347～1368）の時代，仏暦1900年（A.D. 1357年）の刻銘のある Nakhōn Chum の碑文に

“……Thammathetsana an pen ton wa Phramahachat ha khon suat lae midai loei, Thammachadok an ūn sai mi ton ha plai midai mi plai ha ton midai loei……”（Ⅲ/1/36～38）¹⁾ と Phramahachat と Thammachadok の二語が見られる。また，同時代の Wat-P-amamūang の碑文には Li-Thai 王は仏暦1905年（A.D. 1362年）に出家され「ヴェーサンタラの如く徳を施しておられた。」（Ⅵ/1/4～5）²⁾ と記されている。Li-Thai 王は＜Trai phum katha＞を著わし，Maha-thammaracha（偉大なる法治王）と称した，敬虔な仏教徒であった。そして，当時，Li-Thai 王が547番目のヴェーサンタラ・ジャータカに例えられる程，ジャータカの話は既に広く伝承されていたと考えられるが，スコタイ時代のジャータカがどのような形で伝承されていたか詳かでない。

1.2 アユタヤー王朝成立（A.D. 1350年）の約100年後，Trailokkanat 王（A.D. 1448～1488）の時代に＜Mahachat khamluang＞が編纂され今日まで伝えられている。＜Mahachat＞とは「大本生」とも訳すべき意味になるが，タイ族の間では，パーリ経典に伝えられたジャータカ譚 547話中の最後のジャータカ＜Wetsandōn Chadok＞（Vessantara-Jātaka）を指す。＜Wetsandōn Chadok＞はシャカの生涯を想起させる内容を持ち，菩薩の布施，持戒，忍辱，精進，禪定，智慧，方便，願，力，智の十波羅蜜を表現し，しかも 547 話中，最も長い話であるため，多くのジャータカ譚で最も重要とされ，幾度となく説き聞かされてきた。

＜Mahachat＞という呼称は接頭辞の付加された＜Phramahachat＞の形でスコタイ時代に用いられていたことは先に挙げた通りである。

また，パーリ経典での＜Wetsandōn Chadok＞を含む80偈以上のジャータカを＜Thotsa Chat＞（Dasa-Jāti）あるいは＜Phracao-Sip-Chat＞と呼んで＜Mahachat＞に次いで重要視される。³⁾

Khamluang という語の意味は，通常 i.) 国王あるいは高貴な王族が自ら著作したか，あるいは著作を命じた書 ii.) 内容が威光を持ち，歴史上または宗教上重要な内容を持つ書 iii.) 手本とすべき正統な書をいい，いずれかに該当する書が Khamluang と呼ばれる。⁴⁾＜Mahachat khamluang＞の場合は，国王の命により翻訳編纂された書の意味である。すなわち，仏暦2025年（A.D. 1482年）Trailokkanat 王が宮廷学者に命じ著わしたジャータカ譚の中の＜Vessantara Tātaka＞である。翻訳はパーリ語原典の先行文章をほとんど改変することなく，逐語訳にした文章は，Rai-yao と呼ぶ詩形式⁵⁾になっているが，一部 Kap や Khlong, Chan の詩形式も用いられている。Rai-yao としてはタイ語で残っている最古の著作である。これは読経用の書であっても説教書の目的ではなかったと考えられ発想様式の展開，翻案はみられない。Trailokkanat 王は，晩年ピッサノークに住み，＜Mahachat khamluang＞もピッサノークで僧侶や宮廷学者を集め，翻訳の分

担を命じた。パーリ語文の一句を挙げ、その次にタイ語文を添えていく形式がとられ、⁸⁾ 13章が完訳されたのであろう。現在伝えられているのは13章中の7つの章であるが、中でも *Thotsaphôn* の章は紛れもなくアユタヤー初期のタイ語で書かれているといわれ、他に当時の外来語であったビルマ語、クメール語も散見され、タイ語史研究上に貴重な文献の一つとされる所以である。ここで13章と呼ぶのは、タイ語訳では13章に分け各章に呼称を与えている。〈*Mahachat khamluang*〉に限らず、その後に翻訳、改作された〈*Wetsandôn Chadok*〉は必ず13章に分けられている。⁹⁾

1.3 〈*Mahachat khamluang*〉が編纂されてから約130年後、Songtham王（A.D. 1620～1628年）の御作とされる〈*Kap Mahachat*〉が今日に伝えられている。〈*Kap Mahachat*〉は〈*Mahachat khamluang*〉に比し、パーリ語の個所がほとんど消失して、わずか各段落の初めに数語残っている。先にあげた〈*Mahachat khamluang*〉が王侯貴族の学問的趣味による対訳法に対し、〈*Kap Mahachat*〉は説教のための材料書性格から、美文調の解説書傾向が見られる。*Kap* とは詩形式の一つであるが、当時 *Kap* と呼ぶのは詩一般の呼称であって、実際は *Rai-yao* を用いている。文体は同時代の作品に比し、古語が少なく現代語に近い表現が見られるため、原本のスタイルを模倣して、バンコク王朝時代に書き直されたものと推測される。〈*Kap Mahachat*〉の出現には、口誦性を持った、後の寺院で用いる時の説教書 〈*Mahachat klôn-thet*〉の発生を見ることができると推測される。すなわち、既にパーリ語を省いた如く、逐語訳より意識の方法を取り、語って聞かせるように著作された。しかし、〈*Wetsandôn Chadok*〉は一日で最後まで全部聞き終える方が、福多く、御利益があると一般に信じられるようになるにつれ、アユタヤー時代末期には話を短縮した〈*Mahachat klôn-thet*〉が幾つも続々と著わされた。⁸⁾ そしてジャータカの持つ宗教的要素が強まる余り、その功利的目的によって、因果応報の理を説明しようとする傾向が強くなり、一方で、文章の粗雑化、文学的世界の幅や奥行が狭く浅くなることはまぬがれない。しかし、一方、唱導説法によって庶民の口誦活動はますます幅広く、拡がりを見せ、その種本も異本が異本を生み、民衆のこばにこなれていった。

1.4 〈*Wetsandôn Chadok*〉の話を聞く慣習が、タイ族の間で、いつの頃から始まったかは定かではないが、スコータイ、アユタヤーの時代には既に一般に親しまれていたであろうことは、前掲の碑文に現われることや〈*Mahachat khamluang*〉や〈*Kap Mahachat*〉が残存していることから容易に推測できる。この *Thet Mahachat* と呼ばれる慣習は、タイの旧暦12月中旬（現在の11月頃）野良仕事も一段落してあとは雨季に水量の増した田の水が減少するのを待つ間、稲刈りの前の農閑期に行なう、楽しい仏教行事の一つである。定期的に寺院で行なわれる場合、多くは寺院運営資金の募金が行なわれる。また葬式や得度式のある家庭で、語りの上手な僧侶を招いて行なわれることもある。⁹⁾ この行事は北タイや東北タイでも盛んに行なわれている。北タイでは *Tang tham luang* と呼び、説教の時の節廻しを *Rabam* という。例えばチェンマイで行なわれているのは *Rabam nam tok tak*、プレーでは *Rabam nok-khao hoen*、ナーンでは *Rabam chang kham thung* といった節廻しで行なわれている。またその説教に用いられる教本には58種もの文体の異なる刊本があるという。¹⁰⁾ 東北タイおよびラオスでは *Bun phrawet*

と呼んで、2～3月頃に行なわれる。¹¹⁾

1.5 <Wetsandön Chadok>のパーリ語原典がちょうど千句あるところから、タイでは<Khattha phan> (千句) とも呼んでいるが、この一つのパーリ語原典から実に多くのタイ語訳が生まれた。それらを総称して<Mahachat klön-thet>という。Siam Society に保管されている北タイ語版だけでも20種もあり、¹²⁾ その他に東北タイ、南タイ語訳を加えれば、相当な数になる。タイ族がインドシナ半島に移住してインド文明を受容し始めて以来、現代に至るまでの永い時代にわたり、多くの詩人や学者により幾度となく翻訳され、改作され、方言に直され、またほとんどあらゆる詩形式によって表現された。これほどの作品はタイ文学史上、他の作品に見出すことはできない。¹³⁾ しかし、組材としてのジャータカを如何に咀嚼したかの問題となると、翻案、構想の展開はみられず、技巧の面で、多くの表現形式を持つにとどまる。これは <Wetsandön Chadok>のみが、他のジャータカに比し、説話の中の文学性よりも宗教性に多大の価値を持たせ、文学的形象化は等閑に付されてしまったからだ。素材を通して価値を創出することはせず、価値は価値として少しも違えず受容しようとしたためであり、伝統的価値を持つものについての伝達態度を執った。

1.6 バンコック王朝 Rama V世 Chulalongkorn 王(A.D. 1868～1910)は、ジャータカが仏教徒のみならず異教徒を含む全人類の文化遺産という見地から、多くの外国語に翻訳されていること、タイ国では未だ原典に忠実でなく、かつ部分訳のみで完全な訳がないことから、ジャータカのタイ語全訳を完成すれば、文学、仏教に更に多大の貢献をすると考え、僧侶や学者を動員しての翻訳を命じた。翻訳作業は1904年に開始されたが、王はその完成を見ず1910年歿、1931年にジャータカ547話全部が完成し、<Nibat Chadok> (Nipāta Jātaka) 22巻となって逐一出版された。

2.1 タイ族には先のパーリ經典のジャータカ547話以外に、<Panyat Chadok> (Paññāsa-Jātaka) が伝承されている。<Panyat Chadok>のタイ語訳版編集を指揮した Damrong-rachanuphap 親王は、その「まえがき」で「<Panyat-Chadok> はタイ国で古くから語られてきた50の古い伝説である。仏暦約2000～2200年(A.D. 約1450～1650年) チエンマイの僧がパーリ語でジャータカの形式に編集した。時恰も国内の僧が多勢セイロンに留学した頃で、パーリ語に造詣が深く、セイロンの僧にならって、帰国後パーリ語で書物を著わした。例えば、<Mongkhonthipani> (Maṅgala Dipanī) などの如き教義解説書、セイロンの「大史」(Mahāvamsa)を模倣した<Chinakalamalini> (Jinakālamālīnī) のような仏教史等にみられる如く、<Panyat-Chadok>も<Nibat Chadok> (Nipāta-Jātaka) を模倣してジャータカの形式に著わした。三蔵經と同じ言語を用いることにより仏教を永遠に弘隆し、その書を抛り所として捧げるという意図の下であったが、そのパーリ語の知識は先にあげた書には及ばず、レベルの低下が見られることから、上述の時代も末期に著わしたと思われる。

<Panyat chadok>の原本は貝多羅葉本50束 (phuk) で、現在では、タイ国、ルワンプラバーン (ラオス)、カンボジアにしか残っておらないようである。かつてビルマにも伝えられ<Chiangmai Panyat> (Zimmé Paṇṇāsa) と呼ばれたが、時のビルマ王は仏陀のことを賈作

したものや焚書を命じたため、残らなかったといわれている。』¹⁴⁾そして今日までタイに伝えられている＜Panyat chadok＞については「原本は完全な形では残存しておらず、バンコクの図書館員たちが欠落した部分を蒐集した。Wat Rakhang から探し出したり、Wat Arun から入手したり、また最近では Wat Prathum-khongkha から一部 入手したりした。そしてそれらを編集して完本が仏暦2466年(A.D. 1923年)に完成した。＜Panyat Chadok＞出版は、当時バンコク図書館会長の地位におられた Sommot-amōraphan 親王の御意向であり、親王御自身＜Panyat Chadok＞の最初の話である＜Samutthakhot＞の翻訳の労をとられた。』¹⁵⁾

原文はパーリ語でビルマ文字が用いられているのは、北タイはかつてビルマの支配下にあったためであるが、今日、北タイでは北タイ方言による韻文や散文に翻訳され、あちこちの Hō tham と呼ぶ経蔵庫に保管されていて、僧や住民はこれらのジャータカを Tham khao と呼んでいる。¹⁶⁾

2.2 この＜Panyat Chadok＞はパーリ經典のジャータカとは異なり、後世のタイ文学に多くの題材を与え、その物語は翻案され、詩歌となり、戯曲となったが、今、なおタイ族固有の説話として信じられ語り継がれているものもある。ここでは、＜Panyat Chadok＞国立図書館版に収められたジャータカの題名を全部挙げ、その中のいずれのジャータカ譚が、現在に伝えられているタイ族の説話文学のいずれの物語に該当するかを対応させてみた。

1) Samutthakhot Chadok, ＜Samutkhot khamchan＞アユタヤー時代中期 Narai 王時代、作者は Phramaharatchakhru, Narai 王自身によるが、未完であったため、バンコク王朝になり Paramanuchitchinorot 親王が後段を続けて完成。

2) Suthon Chadok, ＜Suthon khamchan＞バンコク王朝ラーマⅡ世の治世, Phraya-isaranupha (On) 作。＜Nang Manora＞アユタヤー王朝末期、歌劇が発達し、当時＜Nang Manora＞も演ぜられた。特に南タイに伝わる＜Nora＞(Manora の約音)の舞踊は有名である。近年、南タイ、ソクラーで南タイ方言による＜Manohara Nibat＞が発見され、＜Suthon Chadok＞の伝播と文学性、方言研究に極めて有益である。ラオスでは＜Thao Sithon＞。Jean Drans によるフランス語訳＜Histoire de Nang Manora et Histoire de Sang Thong＞がある。もちろん現代タイ語訳も数種ある。

3) Suthanu Chadok

4) Ratanapachot Chadok

5) Siriwiwibunkitti Chadok, ＜Konbot Siriwiwibunkiti＞アユタヤー王朝末期 Bōrommakot 王の治世 Luang-sipricha (Seng) の作品。

6) Wibunrat Chadok

7) Siricuthamani Chadok

8) Cantharat Chadok

9) Suphamitta Chadok

10) Sirithōn Chadok

11) Thulokbandit Chadok

12) Athit Chadok

- 13) *Thukammanik Chadok*
- 14) *Mahasurasen Chadok*
- 15) *Suwannakuman Chadok*
- 16) *Kanokwannarat Chadok*
- 17) *Wiriyabandit Chadok*
- 18) *Thammasonthok Chadok*
- 19) *Suthatsana Chadok*
- 20) *Watdingkhulirat Chadok*
- 21) *Borankabinrat Chadok*
- 22) *Thammikabanditrat Chadok*
- 23) *Cakthan Chadok*
- 24) *Thammarat Chadok*
- 25) *Nörachiwa Chadok*
- 26) *Surup Chadok*
- 27) *Mahapathum Chadok*
- 28) *Phanthakhan Chadok*
- 29) *Phahalakhawi Chadok*, <Khawi> バンコク 王朝 ラーマ II 世が戯曲 (*Bot lakhön nok*)
として著作。<Sūakho khamchan> アユタヤー 王朝 中期 Phramaharatchakhuru の作。北タイ
では<Thammachangphong>とか<Nangphomhöm>と呼ばれて親しまれている。
- 30) *Setbandit Chadok*
- 31) *Puppha Chadok*
- 32) *Pharanasirat Chadok*
- 33) *Phromkhotrat Chadok*
- 34) *Thewarukkhakuman Chadok*
- 35) *Salop Chadok*
- 36) *Sitthisan Chadok*
- 37) *Nörachiwakathin Chadok*
- 38) *Atithewarat Chadok*
- 39) *Pacittakuman Chadok*
- 40) *Sapphasitthi Chadok*, <Sapphasitthi khamchan> バンコク 王朝 Paramanuchitchino-
rot 親王作。北タイでは<Khao nokkracap>
- 41) *Sangkhapatta Chadok*
- 42) *Canthasen Chadok*
- 43) *Sison Chadok*
- 44) *Suwannakatchapa Chadok*, 補遺 5 参照。
- 45) *Wōrawongsa Chadok*

- 46) *Arinthama Chadok*
- 47) *Rotsen Chadok*, 説話<*Phrarotsen*>北タイでは<*Suwannamokha*>あるいは<*Ma kao hang*>
- 48) *Suwannasirasa Chadok*
- 49) *Wanawana Chadok*
- 50) *Phakun Chadok*

補遺

- 1) *Sonantha Chadok*
- 2) *Sihanat Chadok*
- 3) *Suwannasangkhā Chadok*, <*Sangthōng*>アユタヤー王朝末期, 既に戯曲として著わされたが, バンコク王朝ラーマⅡ世による著作がある。Jean Drans による仏訳, 江尻英太郎による「ほら貝王子」の邦語訳, 英訳<*The Story of Sangha*>がある。
- 4) *Surappa Chadok*
- 5) *Suwannakatchapa Chadok*, <*Pla bu thong*>北タイでは<*Tao nōi kradōng kham*>
- 6) *Thewantha Chadok*
- 7) *Subin Chadok*
- 8) *Suwannawongsa Chadok*, <*Rūang Honghin*>
- 9) *Wōranut Chadok*
- 10) *Sitthasa Chadok*
- 11) *Canthakhat Chadok*, 北タイでは<*Cantakha*>, ラオスでは<*Nithan Thao Canthakhat*>, P. S. Nginn によるフランス語訳<*Chanthakhat*>もある。

その他にも<*Panyat Chadok*>から題材を取り翻案したといわれている作品はかなり存在するが国立図書館版には該当するジャータカがない。それらの物語を挙げると

<*Suwannamekha*>, <*Wannaphram*><*Canthaprachot*>, <*Buaruang Hong'ammāt*>
 <*Campa si ton*>, <*Pla taphian*><*Pora bao nōi*>, <*Wongsawan*>, <*Saengmūang*>
 <*Kamkadam*>, <*Suwannahong kham*><*Kamphra buatōng*>, <*Techoyamo*>
 <*Buaruang Taeng'ōn*>ラオスでは<*Nang Taeng'ōn*>, <*Cucawanna*>, <*KhunThūng*>
 <*Sangsinchai*>ラオスでは<*Sangsinsai*>

2.3 近代以前のタイ文学史に現われる文学作品の過半数が, パーリ経典所伝のジャータカ物語と, この<*Panyat Chadok*>所伝のジャータカ物語に題材を求めた作品であることがわかる。

しかも<*Panyat Chadok*>に題材した作品が圧倒的に多いのは, 民間伝承的性格を持ち, 宗教的道德観よりもその庶民的な行動感情を題材にしていること, つまり, パーリ経典所伝のジャータカ物語が, 一般に仏教的, 啓蒙的, 説法的であるに対し, <*Panyat Chadok*>は非仏教的, 地方的, 世俗的, 民話的でありその街談巷説的な説話群を構成して庶民的平俗性が, 文学として多くの作品を生みだす契機となったと考えられる。

<*Panyat Chadok*>を単独に見る場合, Damrong 親王の「まえがき」にもかかわらず多くの

疑問が残る。まず i) Damrong 親王はタイ族古来から伝わる説話と述べ、一般にもそう信じて疑うことをしないが、話の発想様式、構成、背景はインドの説話と相似している。例えば、有名な〈Nang Manora〉は北方小乗仏教の Avadāna として最もポピュラーな説話であるといわれる。¹⁷⁾ また、〈Sangthōng〉に見られる海洋航海、ナーガ、鬼が島の登場は、タイ族古来の説話と考えることが難しい。むしろパーリ經典所伝のジャータカより古く、あるいは別の徑路で広範に伝承されたインド説話と考える方が妥当である。ii) もっともタイ族のインド説話受容が久しくなるにつれ、物語構成や叙述の除去、付加、書き換えが多くなり、タイ族による創作が加わったことも事実あるに違いない。例えば、〈Sangsinchai〉のラーオ語版〈Lam Sinsai〉では、チェンマイ王国を建設したと伝えられる Mengrai 王がジャータカの菩薩の前生として描かれ、Lanchang (現ラオス)、Yunnan (雲南)、Tavoy (ビルマの一地方) 等インドシナ半島の地名が見られる。¹⁸⁾ iii) またインド系説話の形式を借り、タイ族古来の説話が意図的に混入されたとも考えられる。「ジャータカ50話」なるタイトルを有するにもかかわらず、国立図書館版には補遺を含めて60有余が蒐集されている。伝本による出入とも考えられるが、それ以外にも〈Panyat Chadok〉から発したであろうと推察される伝承説話として、現在約20話が挙げられている。まとまりの良さから〈Panyat Chadok〉としたものの、その背後にもっと多くの説話の存在、伝承を伺うことはできないか。

3.0 タイ族に伝承されたジャータカ物語にはパーリ經典所伝のものと、地元で編纂された〈Panyat Chadok〉との大きく二つの流れがあり、ジャータカに題材を求めた文芸作品、説話も二つの流れを汲むものに二大別できる。パーリ經典所伝のジャータカは經典の一部として扱われている如く、宗教上、一般民衆の道德規範形成に役立ったことはもちろん、その豊富な物語は〈Panyat Chadok〉と共に文芸の発達に寄与した。特に〈Panyat Chadok〉は、その地方的民族的性格の物語から一般民衆に親しまれ、歌謡、戯曲に展開した。直接ジャータカに題材を求めた文芸作品以外にも、何んらかの形でジャータカの影響を受けた作品は多い筈であり、近年、にわかに関心が持たれ蒐集されだしたタイの民間説話にも同様のことがいえよう。こうしたジャータカの影響を受けた、あるいは受けたと思われる文芸作品や民間説話が、翻訳、翻案され、口承あるいは書承された形を、説話伝承の過程の形態として見ると共に、その説話のうち、どのような作品を選んで、自己の著作の中に書き入れていったか、原説話の主題や構成あるいは叙述が、どのような形で存在し、どのような改変が加えられ、今のような形態となって定着したか、また文学以前の説話が、ある説話において文学的なものとなる契機は何か等々、興味深い問題が数多くある。今後の研究課題としたい。

註

- 1) p. 39, p. 45, *Prachum Silacarūk phak thi 1, Carūk Sukhothai*, B. E. 2500.
- 2) p. 72 p. 74, *ibid.*
- 3) 〈Thotsa Chat〉とは次の10話を指す。

1. *Temiya-Chadok* (Mūga-Pakkha-Jātaka)
2. *Mahachanok-Chadok* (Mahājanaka-Jātaka)
3. *Suwannasam-Chadok* (Sāma-Jātaka)
4. *Nemirat-Chadok* (Nimi-Jātaka)
5. *Mahosot-Chadok* (Mahā-Ummagga-Jātaka)
6. *Phurithat-Chadok* (Bhūridatta-Jātaka)
7. *Canthakuman-Chadok* (Khaṇḍahāla-Jātaka)
8. *Phromnat-Chadok* (Mahānārada-kassapa-Jātaka)
9. *Withun-Chadok* (Vidhurapaṇḍita-Jātaka)
10. *Wetsandōn-Chadok* (Vessantara-Jātaka)
- 4) p. 57, Plūang na Nakhōn, *Prawat wannakhadi Thai samrap naksūksa*, Thaiwatthanaphanit, B. E. 2503.

なお、＜Khamluang＞の名が付されているタイ語の書籍は＜Mahachat khamluang＞＜Nantho-pananthasut khamluang＞＜Phramalai khamluang＞＜Phranon khamluang＞の四書しかない。

- 5) 詳しくは富田竹二郎「タイ詩の構成形成について」1957を参照。
- 6) pp. 16～17, Thanit Yupho, *Tamnan thet mahachat*, B. E. 2501.
- 7) 13章とは、
 1. *Thotsaphōn* (Dasavara-gāthā)
 2. *Himaphan* (Himavanta)
 3. *Thankan* (Dāna-kaṇḍha)
 4. *Wanapawet* (Vanapesana)
 5. *Chuchok* (Jujakapabba)
 6. *Culaphon* (Cūlvanaṇaṇṇana)
 7. *Mahaphon* (Mahāvanaṇaṇṇana)
 8. *Kuman* (Dāra-kapabba)
 9. *Matri* (Maddipabba)
 10. *Sakkaban* (Sakkapabba)
 11. *Maharat* (Mahārajāpabba)
 12. *Chakasat* (Chakkhattiyapabba)
 13. *Nakhōnkan* (Nagara-kaṇḍha)
- 8) pp. 53～54 Cūa Satawethin, *Prawat wannakhadi*, Krasuang-sūksathikan, B. E. 2504.
- 9) この *Thet Mahachat* の、寺で行なわれる際の様子については Sathienkoset, *Praphehi kiao kap thetsakan trut sat*, Samakhom sangkhomsat haeng prathet thai, B. E. 2506 が極めて詳しい。
- 10) pp. 126～129, Sanguan Chotisukrat, *Praphehi thai phak nūa*, Odien sato, B. E. 2512.
- 11) pp. 515～516, Bunrūang Canyon, *Mōradok chao isan*, B. E. 2505.
- 12) p. 94, Mani Phayōmyong, *Prawat lae wannakhadi Lanna*, B. E. 2513.
- 13) 現在でも＜Wetsandōn chadok＞のタイ語訳は数種購入することが可能である。
 1. *Mahawetsandōn chadok chabap 13 kan*, Ongkankha khōng khurusapha, B. E. 2506.

2. *Mahawetsandōn chadok samnuan thetsana 13 kan*, Krom-sinlapakōn, B. E. 2514.
3. *Nangsū thet rūang wetsantrasadok*, Krom wannakhadi haeng ratsaanacak Lao, B. E. 2504.
4. Banyen Limsawat, *Mahachat khamklōn*, Udommit, B. E. 2513.

解説書として

5. Phrathamkosacan, *Parithat wetsandōn chadok*, Soemwitbannakhan, B. E. 2513.

事典として

6. Chaloeam Sukkasem, *Saranukrom mahawetsandōn chadok*, Phraepitthaya, B. E. 2509.
- 14) pp. iii~iv, *Panyat chadok chabap hōsamut haeng chat, phak 1*, Sinlapabannakhan, B. E. 2499.
- 15) p. v, *ibid.*
- 16) pp. 18~19, Mani Phayōmyong.
- 17) p. 533, Padmanabe S. Jaini "The Story of Sudhana and Manoharā: An Analysis of the Text and Borobudur Reliefs" *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* Vol. XXIX. pt. 3, 1966, University of London.
- 18) p. 136, Mahasila Wirawong, *Wannakhadi Lao phūa kansūksa*, Kom-wannakhadi, Vientiane Laos, B. E. 2503.

参 考 文 献

1. 干瀉龍祥「ジャータカ概観」パドマ叢書2, 鈴木学術財団, 1961.
2. 岩本 裕「インドの説話」紀伊国屋新書A-7, 1963.
3. 雲井昭善「仏教の伝説」春秋社, 1956.
4. 西尾光一「中世説話文学論」塙書房, 19635.
5. P. Schweisguth, *Etude sur la Littérature Siamoise*, Paris, 1951.
6. Cūa Satawethin, *Prawatwannakhadi khōng Krasuang-sūksathikan*, B. E. 2504 (1961).
7. — " —, *Wannakhadi Phutthasatsana*, Khlangwitthaya, B. E. 2506 (1963).
8. Plūang na Nakhōn, *Prawatwannakhadi Thai samrap naksūksa*, Thaiwatthanaphanit, B. E. 2503 (1960).
9. Mani Phayōmyong, *Prawat lae wannakhadi Lanna*, Chiangmai, 1970.
10. Prakhōng Nimmahemin, *Laksana wannakam phak nūa* (Master Thesis), Chulalongkorn Univ. B. E. 2509 (1965).
11. Wisut Butsayakun, *Wannakhadi Isan*, B. E. 2513 (1970).
12. Mahasila Wirawong, *Wannakhadi Lao phūa kansūksa*, Kom-wannakhadi, Vientiane Laos, B. E. 2503 (1960).
13. Thanit Yupho, *Tamnan Thet Mahachat*, B. E. 2501 (1958).